

—特集にあたって—

## 白嶺丸と海洋地質部の25年

西村 昭<sup>1)</sup>

平成12年度が始まりました。今年度が終了する2001年4月1日から、地質調査所を含む工業技術院の研究所は新しい独立行政法人になります。海洋地質部もこの時に新たな出発をすることになります。地質調査所海洋地質部は1974年7月1日に発足しました。地質調査船「白嶺丸」は、それに先立って、その年の4月1日に就航しました。それ以来25年、地質調査所の海洋地質調査研究に不可欠な調査船として活躍してきましたが、今年の3月末をもって引退しました。このたび、「白嶺丸と海洋地質部の25年」として、白嶺丸と海洋地質研究の歴史とこれからの展望も含めて、地質ニュースの特集として企画し、多くの方々から御執筆をいただきました。これから、3号にわたる特集でお届けしたいと思います。

さて、白嶺丸と海洋地質部が25年をともに過ごしたということには大きな感慨があります。とは言え、私自身は海洋地質部の発足や白嶺丸の就航時には、まだ地質調査所に就職していませんでした。今回いただいた原稿を読ませていただいて、その両者の出発に至るまでの、そしてその出発直後の諸先輩の大変なご苦労とご努力があった事を強く感じました。25年と一言で言っても大変な長い年月であったと思います。そして、その間の調査や研究や様々な出来事の一つ一つの積み重ねにより、歴史が創られてきたように思えます。

話しは少し変わりますが、今回の特集の中で、通商産業省資源エネルギー庁の遠藤正利海洋開発室長の記述の中にありますように、昨年から今年の初めに、海洋関連技術分野に関する新しい産業技術政策の展開のため産業技術戦略の議論が活発に行われました。わたしもこの議論に参加させていただいたのですが、今後25年間、2025年までの変化と将来を見据えて、新産業の方向性を示そうとするものでした。これからの25年がターゲットでしたが、社

会構造・経済状況、そして価値観まで予想する事は極めて困難なことです。海洋地質部と白嶺丸の出発した25年前に現在の状況が予測できたかどうか。例えば、地球規模の環境問題が、現在のように社会や政治の世界にも影響を及ぼすようになるとは予想もしていなかったと思います。

本特集に奈須紀幸先生から「海洋地質研究の過去、現在、未来」について執筆いただきました。1831年に始まる年表には、海洋地質を中心とした科学の歴史が総括されています。本文では、現在の地球環境問題の次にくる解決すべき問題が予測されています。そして、未来への壮大な地球改造計画の提案がなされています。これは25年を単位としたような近未来のことでなく、その100倍もの未来に通じる壮大な人類の事業です。

25年間は長いようですが、人類の歴史では短いかもしれません。私としては、この機会にせめて、25年先を思い今後を考えていきたいと思っています。

本特集は、地質調査所の海洋地質研究や白嶺丸に関連して来られた方々、海洋地質部の出発時から部や白嶺丸を支えていただき、その後、外から海洋地質部を見守っていただいた先輩諸氏、そして現在海洋地質部の研究を進めている現役の部員に、それぞれの立場や考えかたから自由に執筆していただきました。執筆いただいた方々にお礼を申し上げます。全体として、必ずしもまとまった一方向性のものでないのは、海洋地質が大きな多様な分野であることと、企画したものの力量不足とご理解いただければと思います。

正確には白嶺丸はこの3月末で丸26年で役目を終了しました。また、海洋地質部は4月で25年9ヶ月です。およそ25年、四半世紀という事で、25年を特集の標題にさせていただきました。

1) 地質調査所 海洋地質部長

キーワード: 海洋地質, 白嶺丸